

秋田 喜代美
(Akita Kiyomi)



東京大学教授

東京大学大学院教育学研究科教授。博士(教育学)。専門は教育心理学、保育学、授業研究。現在、日本保育学会会長、日本読書学会副会長。日本乳幼児教育学会理事、日本教育学会理事、日本発達心理学会理事等を務める。日本学術会議第20期、21期会員(現在、教育学分野委員長)。国立教育政策研究所評議員、文部科学省中央教育審議会初等中等教育部会教育課程委員、厚生労働省児童保障審議会児童部会委員、(財)全国私立幼稚園研究機構理事などを務めている。

東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。日本教育心理学会城戸研究奨励賞、日本読書学会読書科学研究奨励賞、(財)発達科学研究奨励賞等を受賞。主な著作に「読書の発達過程」(風間書房)「読書の発達心理学」(国土社)「子どもをはぐくむ授業づくり」(岩波書店)「授業研究と学習過程」(放送大学出版会)「知を育てる保育」「保育の心もち」「保育のおもむき」(いずれもひかりのくに)など、多数。

幼児期から児童期への教育

— 子ども・保護者・教師の経験から考える幼小文化間移行 —

遊びを中心とした指導法である保育所や幼稚園から、授業を中心とした指導法である小学校への文化間移行は、子どもにとっては大きな期待と飛躍の時である。幼小の連結、連携は日本では幼稚園が設立した明治時代以来ずっと議論され続けてきていることである。制度的な変革を行うのか、園と学校は相互に独立を保ちながらも内容的にいかに連続性を保ちうるのかがその大きな論点となってきた。時代的な変化を調べてみると、時代背景に伴って、幼小連携に対する見解や視点は異なっている。そして幼小の文化間移行を円滑にするために、現在日本では幼小の接続、連携、交流が国や各地方自治体でさまざまなことが試みられ、今秋には新たな報告書も提出されることになっている。小学校でもスタートカリキュラムという固有のカリキュラムを接続の時期に設定することが要請されることになっている。

このような動向の中で、日本の子どもたちや保護者はこの園から学校への文化間移行をどのように経験をしているのだろうか。私どもの研究プロジェクトでは、卒園前の子どもたちが幼稚園から小学校へ移行してどのような経験を語ったのか、また保護者は何を感じたのか、また子どもや保護者だけではなく、幼稚園教師と小学校教師も人事交流を行ってみることで何を経験したのかを分析してきた。移行を経験した人たちの認識から、園文化と学校文化がどのように異なるのかが見えてくる。

保育・教育の質を高め、子どもにとって主体的に活動に取り組み、没頭できる経験の保障、協働し学びあう関係の形成と安心して安定できる生活の保障が、幼児期にも児童期にも一貫して重要である。そのためのデザインが現在求められているといえるだろう。